

# 落窪物語の教材価値

中井賢一

## On the Worth of the *Ochikubo-monogatari* as a Teaching Material

Kenichi NAKAI

**要旨** 落窪物語は、〈自身の才覚によって「継子いじめ」を克服する物語〉であり、〈読み手と物語世界との距離が近い物語〉でもある。落窪物語が高校の授業で扱われることはまずないが、「主題」・「表現」の両面において、この物語には大きな教材価値が内在しており、指導者は積極的に授業に用いるべきである。

### はじめに

高校古文の検定教科書で落窪物語を採録するものは極めて少ない。管見による限り、「古典講読」用の教科書として二社が掲載している<sup>①</sup>だけで、「国語総合」や「古典」といった、多くの高校で中心的に使用されている教科書においては、その採録は皆無である。落窪物語が「物語文学史の中でも抜群に面白い」作品であり、「古典文学でこれほどの痛快さを味わわせてくれるテキストはほかに探すことができない」<sup>②</sup>にもかかわらず、である。

もっとも、その理由は分からないでもない。例えば、私の現勤務校で使用している第一学習社『新国語便覧』を見てみると、落窪物語は、「継子いじめを扱った『住吉物語』や『落窪物語』」、「落窪の君は継母に虐待されるが、貴公子と結婚して幸福になる」といった程度の簡易な説明しかされていないし、こういった現状も関わってか、落窪物語Ⅱ「継子いじめの物語」という主題把握のありかたは、周知の通り、広く固定されている。

学校現場において「いじめ」が深刻な今日的課題であることを鑑みたとき、それを話題にしたストーリーを教室で扱うことにとまどいを覚えるのは、指

導者としては至極当然であろうし、検定教科書が落窪物語を採録しない理由には、おそらくそれと同一線上にある配慮が働いてもいよう。いわば、検定教科書ならではの「教育的配慮」が多く関与していると推察されるのであり、その点においては十分納得させられもする。ただし、それは、あくまで「落窪物語Ⅱ『継子いじめの物語』という把握」に疑義を挟む余地がないならば、である。

本稿においては、まず「落窪物語Ⅱ『継子いじめの物語』という把握」について再検証を行い、その上で、落窪物語の教材価値とその具体的指導の方法や展望について言及を試みたい。

二〇一一年十二月二一日（受理）

宇部工業高等専門学校一般科准教授

一

落窪物語が、「継子いじめ」をモチーフに組み込んだ物語であることは疑いが無い。継母北の方は、継子落窪姫君を、「寝殿の放出の、また一間なる落窪なる所の、二間なる」(巻之一 一七頁)<sup>3)</sup> 部屋に幽閉し、縫製に酷使しつつ、事あるごとに「いじめ」を仕掛けていく。

ただ、私たちが注意しなければならないのは、「いじめ」る側北の方よりも、むしろ「いじめ」られる側落窪姫君の対応のありかただ。

例えば、北の方が落窪姫君の美麗な鏡箱を強引に取り上げてしまう場面(巻之一 七〇〜七四頁)。感謝の言葉すらかけず一方的に落窪姫君の道具を持ち出していく北の方に対して、落窪姫君の従者「あこぎ」が「『：この御方の物は、ただ見るままに、御方々(北の方腹の姫君たち)の物にのみなり果てぬ。(落窪姫君は)かく心ひろくおはしませども、人(北の方)の御志は見ゆる』と腹立ちあゝ(巻之一 七三頁)るのに対し、当の落窪姫君は「女君をかしくて、『さはれ。いづれもいづれも用果てなば賜びてむ』といらふ」(巻之一 七三頁)ばかりである。私に解釈を施しておくならば、「姫君のお持ち物は、ただ見ているうちに、北の方腹の姫君たちの物にばかりなってしまう。姫君はこのように寛大なお心でいらっしやるけれども、北の方の感謝の心は見えますか。見えますか。」と憤る「あこぎ」に対して、「落窪姫君はおかしくて、『それでも良い。どの道具も用が終わったらきつとお返し下さるでしょう』と答える」となるうか。

看過してはならないのは、落窪姫君が、北の方の「いじめ」に対して、ことさら恨むでも悲しむでもなく、特に気に留めるほどのことでもないかのごとく振る舞っている点だ。あたかも、北の方の悪意を落窪姫君が軽くかわした体である。

無論、当初からこのような、いわば余裕のある対応をしていたわけではなかった。例えば、北の方が裁縫をさせはじめた時期、「夜も寝も寝ず縫はず」と、落窪姫君は「(いかでなほ消えうせぬるわざもがな)と嘆く」(巻之一 一九頁)ありさまであった。徐々に「心ひろく」対応するよう、「いじめ」をかわす術を獲得していったことが知られる。

すなわち、落窪姫君は、「心ひろく」あることで「いじめ」に對抗し得ているのである。

さらに注意したいのは、このやりとりを聞いていた道頼(落窪姫君を正妻に迎える「貴公子」)が、「(まこと)と聞きたまひ」、「(なほあらじにて、思ひやみなましかば)と思ふ」(巻之一 七三頁)ことだろう。解釈を施して

おくならば、「本当に落窪姫君は寛大だと思って」、「やはり大した女性ではあるまいと考えて、通うのを止めてしまったら残念なことになっていたらどう」、となるうか。この「心ひろく」ある落窪姫君の対応が、道頼の愛情をより一層強化するという構図になっている。周知の通り、道頼は、後に太政大臣にまで登り詰め、落窪姫君ともども一族の栄華を極めることになる。「継子いじめ」という『話型』は『貴種流離譚』のバリエーションの一つと言われることもある<sup>4)</sup>が、まさに落窪姫君という「貴種」は、「いじめ」という「流離」から復権し、道頼と共に権力の高みに向けて急浮上することになるのだ。

だとすると、「心ひろく」あるという落窪姫君の身の処し方が、自身を栄華の途に押し上げるエネルギーにもなっていることになる。

つまり、落窪姫君は、その身の処し方によって、「いじめ」をかわし、また道頼の愛情を強化させながら、自身の栄華を切り開く人物なのである。もう一つ、北の方の「いじめ」への落窪姫君の対応のありかたを見ておこう。

例えば、北の方が、三君の夫の縫物を大量に押しつける場面(巻之一 八〜九八頁)。「少将(道頼)いとあはれにうち語らひて、明けぬれば、出でたまひぬ。やがて(落窪姫君が)急ぎ縫ひかけつるほどに、北の方起きて、「縫ひさす」と見しを、(まだしくは、血あゆばかりいみじくのらむ)と思つて、『縫物賜へ。出で来ぬらむ』と言はせたまへれば、(落窪姫君は)いとつづくしげにし、かさねて出だしたれば、(北の方は)本意なき心地して、「口惜しく。いかに。出で来にけり」とて、(叱ることは)やみぬ。」(巻之一 九八頁)とあった。

この日、落窪姫君のもとには道頼が通ってきており、落窪姫君は、北の方に指示された縫製作業のみに集中するわけにはいかなかった。夜中、密かに様子を窺いに来ていた北の方は、落窪姫君が「縫ひさす」のを承知の上で「まだしくは、血あゆばかりいみじくのらむ」と計画する。いわば、完成していかないのを見込んだ上で、「まだできあがっていないなら、血が出るほどひどく叱りつけてやる」と考えたわけだ。ところが、落窪姫君は既に「いとうつくしげにし、かさねて出だし」た。道頼の退出後に一から縫いはじめたわけではなかったにせよ、「やがて急ぎ縫ひかけつる」とあることから、落窪姫君を焦らせるに十分な作業量が残っていたことが推察され、同時に、それでも北の方の来訪に間に合わせる事が可能な落窪姫君の卓越した縫製能力も推察される。

注意したいのは、「本意なき心地」の北の方が、叱ることを「やみぬ」という反応をしたことだ。述べたとおり、北の方にしてみれば、完成していな

いを見込んで強烈に叱りつける口実にしようと思論んでいたのに、意外にも落窪姫君は大量の縫物をあっさり仕上げ上げていたのだから、完全に氣勢を削がれてしまったことだろう。いわば、「強烈に叱りつける」という次なる「いじめ」の契機を失った体である。

このことは、翻って落窪姫君の立場で考えてみるならば、卓越した縫製能力が、次なる「いじめ」から自身を守った、ということにもなる。いわば、落窪姫君の能力が、「いじめ」を回避、あるいは軽減するエネルギーとして機能しているのである。

ここまでをまとめてみよう。

落窪姫君は、自身の卓越した縫製能力を駆使することにより、「いじめ」を回避、軽減する人物である。また、自身の「心ひろく」ある身の処し方により、「いじめ」をもともせず、さらには道頼の愛情強化を呼び込んで榮華の道を切り開く人物である。

つまり、落窪姫君の「いじめ」に対する対応のありかた、身の処し方に注目したとき、この物語は、落窪姫君が自身の能力や心のありかたを基盤に、「いじめ」を克服し、未来を切り開く物語としても読みうるのである。「継子いじめの物語」というより、「自身の才覚によつて『継子いじめ』を克服する物語」として、落窪物語はその主題性を定位されるべき作品だと言えるだろう。

このように考えるならば、落窪物語は、むしろ教室で積極的に扱うべき教材だということにならないか。「いじめ」が今日的課題として深刻であればあるほど、かえつてその「克服」を主題性を含み持つこの作品は、その教材価値が高まると言えるのではないか。もし、私たちが「落窪物語Ⅱ『継子いじめの物語』という把握」に縛られ、それゆえ教室でこの物語を取り上げるのをためらっていたのだとするなら、そのような姿勢は早急に改められねばならないだろう。

## 二

前節では、いわば「主題」の側面から落窪物語の教材価値について考察したのであるが、本節においては、その「表現」の側面に光を当て、同じく考察を進めてみたい。

いささか唐突ではあるが、まず源氏物語総角卷の一節を引用Aとして掲げる。

## A

左の大殿（夕霧）のわたりの事、大宮（明石中宮）も、一猶さるのどやかなる御後見をまうけ給て、そのほかに尋ねまほしくおぼさるゝ人あらばまいらせて、重くしくもてなし給へと①聞こえ②給ど、（句宮は）「しげし。さ思ふたまふるやうなむ」③聞こえいなび④給て、まことにつらき目は（宇治中君に）いかで見せむ、など⑤おぼす…  
（総角卷四四九頁）<sup>5)</sup>

宇治中君を愛し重く処遇しようとする句宮に、母明石中宮が左大臣夕霧の六君との縁談を取り結ぼうと説得するも、句宮はそれに反抗する、という場面である。波線部「左の大殿のわたりの事」が、左大臣夕霧の六君との縁談を示唆している。明石中宮は、一重傍線部「そのほかに尋ねまほしくおぼさるゝ人あらばまいらせて」で、句宮が宇治中君との関係を維持することを認めた上で、二重傍線部「猶さるのどやかなる御後見をまうけ給て」とこの縁談を承諾するよう句宮に促している。対する句宮は、点線部「しげし。さ思ふたまふるやうなむ」。聞こえいなび給て」とあるとおり、多くを語らずに拒否しつつ、宇治中君に「つらき目はいかで見せむ」と重々しい妻として扱うことを心に決めるのであった。

正妻になりうる権門の娘との縁談をまとめた母が、もとの恋人を妾妻として認めるよう譲歩しつつ子を説得するが、当の子本人は、今の恋人を重々しく処遇したく、縁談に乗ろうとはしない、という展開なのであるが、実は、これと極めて似通った場面が落窪物語にも存在するのだ。引用Bとして掲げよう。

## B

御乳母出で来て⑥言ふやう、「かの右の大殿のことは、のたまひしやうにも、のしはべりしに、『わざとやんことなき妻にも、のしたまはざなり。時々通ひてものしたまへかし。殿に聞こえて、四月となむ思ふ』といそがせたまふなり。さる心したまへ」と⑦聞こゆれば、（道頼は）いと恥づかしげに笑みて、「なでふ、男の（いな）と思ふことを、しひてするやうかはある。世の人に似ず、よき身にもあらねば、さのたまふ人もあらじ。かかることなまねびたまひそ。かたはなり。（わざとの妻にもあらざなり）」とは、いかで知りましたまふ。いとさ言ふばかりなき人にもあらぬを」と⑧のたまへば、乳母、「あなわりな。おとども、（ししか）と思し立ちて、いそぎたまふものをば。よし、御覽ぜよ。やんごとなき人のしひてのたまはむことをば、いかはせさせたまはむ。何かは。君達は、はなやかに御妻方のさしあひて、もてかしづきたまふこそ今めかしけれ。  
（思ほす人あり）とて、それをばさるものにて、御文など（右大臣の

姫君に奉りたまへ。かの君も思ふ時は、上達部の女にはあんなれど、落窪の君とつけられて、中の劣にて、うちはめられてありけるものを、かく類なく思しかしづくこそあやしけれ。人は、かたへは父母あたちてかじづかるこそ心にけれ」と⑩言ふに、中将(道頼)面うち赤めて、「古めかしき心なればにやあらむ、今めかしき好もしきこともほしからず、おぼえもほしからず、父母具したらむをともおぼえず。落窪にもあれ、上がり窪にもあれ、(忘れじ)と思はむをば、いかがはせむ。人の言はむも多く、そこにさへ、かくのたまふこそ心憂けれ。ただ御為に志なきに思すとも、今かれもつかうまつるやうありなむ」とて、いと頼もしげなるけしきにて立ち⑩たまふめる…(巻之二 一九〇〜一九二頁)

前の「引用A」との比較の便宜のため、同種の傍線を付してあるので、それぞれ注目されたい。波線部「かの右の大殿のことは…」が、右大臣の姫君との縁談を、その具体的な進められかたも含め示している。乳母は、一重傍線部「(思ほす人あり)とても、それをばさるものにて」で、道頼が落窪姫君との関係を維持することを認めた上で、二重傍線部「御文など奉りたまへ」と右大臣の姫君との縁談を進展させるよう道頼に促している。対する道頼は、二箇所点線部「なでふ…」、「古めかしき心なればにや…」で、縁談を拒否しつつ、落窪姫君を擁護し、正妻として重々しく処遇するよう宣言する、という具合だ。

「正妻になりうる権門の娘との縁談をまとめた」乳母が、「もとの恋人を妾妻として認めるよう譲歩しつつ」「説得するが」、当の乳母子本人は、「今の恋人を重々しく処遇したく、縁談に乘ろうとはしない、という展開」であり、まさに「引用A」と酷似した場面であることが知られるのであるが、ただし、その「表現」には著しい差違が見られる。「引用A」に比して、「引用B」のほうが、明らかに説明が詳細であり、人物も饒舌である。

例えば、双方の波線部。「引用B」では縁談がいかに進められているのか右大臣の見解や動向まで持ち出して詳述するのに対して、「引用A」では「縁談」の事実に至る読み手の文脈判断を期待し、あくまで遠回しの示唆にとどめている。

あるいは、双方の点線部。「引用B」では、道頼が、男の決めたことだからと前提し、自分は大した身分でもなく落窪姫君も正妻に相応しくないとはいえない、と述べ、また、自分が求めるのは当世風の相手でも名誉ある相手でも両親の揃った相手でもなく、ただ落窪姫君だけなのだ、と喝破する。「落窪にもあれ、上がり窪にもあれ、(忘れじ)と思はむをば、いかがはせむ」との道頼の言は、その強い愛情を如実に表して、読み手の心を打つところだ。

このように、実に饒舌に道頼の反論の意志が示される「引用B」に対して、「引用A」では、自身の意を母明石中宮が汲み取ることを期待するがごとく、句宮は、「さ思うたまふるやうなむ」と言葉を飲み込むのである。

これらから明らかなのは、たとえ同じようなストーリー展開であったにせよ、頼末の説明が詳細な分、あるいは、人物が饒舌な分、「引用B」のほうが、具体的に場面内容を理解することが容易であることであろう。風情や余情の有無といった高度な鑑賞に関わる要素は、高校で扱う教材の観点で考察を進めている今は措いておく。「言ひおほせて何かある」や「秘すれば花」などの伝統的文学観・芸術観についても今は問わないでおこう。「引用B」は、「引用A」に比して、読み手が容易に理解できる。すなわち、洗練の度は別にして、落窪物語が作中世界に移入しやすい「表現」になっていることは確かだろう。場面空間や登場人物のありかたが分かりやすくなるよう、読み手に歩み寄った「表現」が多用されている、と言いつても良い。しばらくこの場面から離れる。

他にも落窪物語に、源氏物語の、いわゆる「車争い」と酷似する場面がある。源氏物語では、六条御息所方が、葵上方の物見車場所取り争いの末、自身の車を破壊され後ろに押しやられてしまう。この時の六条御息所の無念は、「又なう人わろくくやしう、何に来つらんと思ふにかひなし」(葵巻二九四頁)と記されている。六条御息所は悔しさを噛み締めつつ、「何に来つらんと」「思ふ」ばかりであった。

一方、落窪物語では、継母北の方一行が、同様に道頼方に車を破壊され押しやられてしまう。この時の北の方一行の反応は次の通り記されている。『出でたまふまじきにやありけむ』『かくいみじき恥の限りを見ること』と、爪弾をしつつ惑ふ。乗りたる人の心地、ただ思ひやらむ。皆泣きにけり。』、さらには、『をいをい』と泣きたまふ。『いかなるものの報いに、かかる目見らむ』と惑ひたまへば、御女ども、『あなかま、あなかま』とのたまふ。(巻之二 二〇七〜二〇八頁)というありさまである。六条御息所と比較したとき、同乗の女君たちの人数が多いこともあるが、しかし、明らかに「饒舌」である。そもそも六条御息所は「思ふ」ばかりで、無念を口にはしなかつた。読み手としては、悔しさを押し殺しているであろう六条御息所の内実をあれこれ忖度するしかなく、物語はそれ以上は何も具体的に教えてはくれない。しかし、北の方一行は、憤りの感情を実際の発言として縷々吐露している。感情の高ぶりがそのまま言葉となつて発せられる点、落窪物語の人物描写は単純で奥ゆかしさに欠けるとも言えなくはないが、反面、実に素直に内実が「表現」されているとも言え、読み手としては、悲嘆に暮れる作中人物たちの心の振幅がいかにあるか、容易につかめることは確かだろう。

「引用A」「引用B」に戻ろう。

実は、落窪物語には、敬意「表現」にも注目すべき特徴があるのだ。両引用文中に①～⑩の番号を付しておいたが、いずれも地の文における作中人物への待遇意識を反映する「表現」である。

高校古典文法の尊敬語・謙讓語に分類してみよう。①は匂宮への謙讓語で②は明石中宮への尊敬語、③は明石中宮への謙讓語で④は匂宮への尊敬語、⑤は匂宮への尊敬語である。⑤は問題ないが、注目すべきは①②と③④の組み合わせが両立していることだ。①②と③④は、いずれも高校古典文法で言うところの「二方面への敬語」であり、謙讓語をより上位者に用いる、と一般的には指導するはずだ。①②では明石中宮より匂宮が上位者、③④では匂宮より明石中宮が上位者、ということになり、高校古典文法の知識からでは、一貫性のないこのような敬語使用は矛盾とも映りかねない。ここは、おそらく身分などとは無関係に、匂宮と明石中宮相互の、相手に対する配慮や気遣いの姿勢が、地の文の語りに影響を及ぼしている、と理解すべきところなのだろうが、この待遇表現の内実分析が本稿の目的ではないので、今は措こう。ともかく今は、源氏物語に一筋縄ではいかない複雑な敬意「表現」が用いられていることが確認できれば良い。

では、対する落窪物語ではどうか。⑦は道頼への謙讓語、⑩は道頼への尊敬語である。⑧も道頼への尊敬語であるが、道頼の言の直前、「いと恥づかしげに笑みて」の「笑む」という動作まで一括し敬意を表しているのを見て良い。見ての通り、「笑つて『:]とおつしやる」という形の「続きの叙述」であるため、⑧の敬意が「一続きの叙述」の全てに及ぶということだ。⑥⑨が乳母の動作であるが無敬語となっている。道頼には一貫して敬意「表現」が付され、その乳母には一貫してそれが付されない。この場面における上位者が道頼であることは一目瞭然であり、また、それが両者の身分差とも矛盾なく合致している。高校古典文法の知識のみで、無理なく両者の関係性を読み解くことができる。

もはや、言を俟つまい。「表現」の観点において、落窪物語は、例えば源氏物語に比して、明らかに饒舌で説明的な、読み手に歩み寄った、感情移入が容易なテキストであり、且つ、敬語をはじめ文法事項においても複雑でなく、読解が容易なテキストでもあるのである。いわば、落窪物語は、〈読み手と物語世界との距離が近い物語〉なのである。

無論、落窪物語の「表現」が〈近い〉のではなく、源氏物語のそれが特別「遠い」のだと見ることもできなくはない。しかし、例えば、藤井貞和氏は、他作品に比して、落窪物語には過去の助動詞「き」が多用されている点に注目され、『き』の持つ「目撃性」を指摘された上で、『おちくぼ』は特に、「現

実感覚の文体とでもいうべき性格を魅力としている」と指摘された<sup>6)</sup>が、この氏の御見解は、「落窪物語は特に、読み手が『現実』に物語世界を『目撃』するかのような『文体』の工夫がなされているところに魅力がある」とも読み替えが可能である。いわば、氏は、助動詞という「表現」の観点から、落窪物語が、源氏物語を含めた他作品よりも、「特に」読み手の「現実感覚」を物語世界に誘引する力が強い作品であることを定位されたのであった。このような氏の分析結果も、落窪物語が、「特に」〈読み手と物語世界との距離が近い物語〉であることを裏付けていよう。

つまり、落窪物語は、読み手が物語世界に移入しやすく読解しやすい「表現」上の特徴を備え持つ点においても、教材として極めて有用な作品なのである。少なくとも、高校の教室で、ほぼ確実に源氏物語が扱われることを思い合わせたとき、その前段階として、落窪物語は、実に有効な教材になりうると思われるのである。

### 三

ここまで「主題」と「表現」の両面から、落窪物語が高校古文の教材として相応しい作品であることを述べてきた。

〈自身の才覚によって「継子いじめ」を克服する物語〉、且つ、〈読み手と物語世界との距離が近い物語〉、それが落窪物語である。私たち指導者は、もつと積極的にこの物語を授業に取り入れるべきだ。そこで、ここまでの考察を踏まえ、以下にその一例を提示しておきたい。

平成二十一年告示の新学習指導要領が、伝統的言語文化の重視を強く打ち出し、また、「内容」の(2)という項目を立て具体的指導方法の例に言及しているのは周知の通りである。単に古典重視というスタンスを言挙げするのみならず、具体的な指導方法にまで踏み込んでいるところに新学習指導要領の大きな特徴があるが、それはとりもなおさず、今回の改訂まで、古典学力の向上に繋がる有効な手立てが体系的に講じられてこなかったことを物語っている。今回「古典B」(もとの「古典」)では、この「内容」の(2)の「イ」で、「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること」と指導方法を例示している。

例えば、前節までの考察過程が、そのままこの指導方法に使えないか。

「同じ題材を取り上げた文章」であり、且つ、「同じ時代の文章」である「引用A」と「引用B」を、同時に学習者に提示するのである。それぞれを読解する行程の中に、説明が詳細であるか否か、作中人物が饒舌であるか否

か、敬語などの「表現」がシンプルか否か、その「相違点」について「読み比べ」をさせた上で、そこから何が読み取れるか、あるいは、どう感じるか、音声言語や文字言語で「説明する」作業を組み入れるのである。短時間により多くの学習者に「説明する」機会を与えるためにグループ討論をさせても良いだろう。発展的に、「どちらが物語として優れているか」等のテーマでディベートやパネルディスカッションをさせても良い。なぜそれら「相違点」が生じるのか「調べ学習」をさせた上でレポートとしてまとめさせても効果的である。源氏物語、落窪物語それぞれの個性を理解させる格好の機会となるうし、あるいは、他作品の「個性」への興味を喚起することにも繋がるう。

新学習指導要領は、「古典B」の「内容」(1)の「ウ」で、「古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。」を掲げている。「人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ」る力を育むためのトレーニングとして授業を位置づけるなら、そのような授業のための最も効果的な教材は、「思想や感情」を「饒舌」に「表現」した作品であろう。そして、その作品が、教育現場における今日的課題の〈克服〉を、少なからず示唆するものであるなら、なお良い。

私たち指導者は、〈自身の才覚によって「継子いじめ」を克服する物語〉、そして、〈読み手と物語世界との距離が近い物語〉である落窪物語の教材価値を見直さなければならぬ。「古典ばなれ」が言われる高校現場において、私たちが最も気を配るべきは、学習者と古文との〈距離が近い〉教材の、そして授業の、創造と検証なのである。

### おわりに

旧来の「落窪物語Ⅱ『継子いじめの物語』という把握」は、必ずしも正確ではない。落窪物語は、「継子いじめ」をモチーフとして、あるいは「話型」として組み込みながら、しかし、その着実な〈克服〉を描いた物語である。学習者に見せるのが憚られる物語ではなく、むしろ、積極的に読ませたい「主題」性を豊かに湛えたそれである。

源氏物語と酷似する場面を含み持ち、しかも、「表現」が決して難解でなく作品世界への移入が容易なことも、「古典ばなれ」の進行の直中にある学習者に提示する材料としては適している。特に、源氏物語を授業で扱う段階のそれとしては効果的だ。

確かに、落窪物語には、露骨で猥雑な描写も多く存在する。落窪姫君に接近する典葉助の失態しかり、三日夜に落窪姫君を訪う道中の道頼のトラブルしかり、車争いで殴り据えられた典葉助の死しかり。しかし、それらは同時にこの物語の「抜群に面白い」場面や「痛快」な場面にもなり得ているはずだ。つまり、それら「露骨で猥雑」な描写が、この物語ならではの「面白」さや「痛快」さを演出し、読み手の物語世界への移入を促進しているとも言えるだろう。読み手との〈距離が近い〉というこの物語の特徴を如実に物語る徴表として、それらも理解されるべきものである。

教育現場においては、もつとこの物語に注目して良い。「教材」として有用な、実に大きな力を持つ作品、それが落窪物語だからである。

### 注

- (1) 筑摩書房『物語・史伝選 古典講読「古文・漢文」』、及び、右文書院『平安文学選―物語 和歌 随想・日記―』。
- (2) 三谷邦明氏「解説」(『新編日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語』小学館)
- (3) 本稿に引用の落窪物語本文、及び、頁数は(2)に挙げた『新全集』本に拠る。『新全集』本の底本は、旧安田文庫本である。なお、『新全集』本の本文は、心内語等の「内話文」を(……)の形で表記している。
- (4) 阿部好臣氏「継子いじめ譚の構造」(『国文学解釈と鑑賞』第五十六巻十号 平成3年10月)
- (5) 本稿に引用の源氏物語本文、及び、頁数は岩波書店『新日本古典文学大系 源氏物語』に拠る。『新大系』本の底本は、大島本であり、それを欠く浮舟巻のみ明融本である。
- (6) 藤井貞和氏「落窪物語解説」(『新日本古典大系 落窪物語 住吉物語』岩波書店)